

へ13
2913
18

行

昭和九年
七月六日
清水

村田

巻端附言

本傳第一輯と六巻以下二巻と第一二輯の二巻とあり

一巻と第二三輯とありは六巻以下一巻と今又四輯と

綴ると及び第一輯の如く六巻を食上下二巻とせし

但一巻と一巻と一編と志と今第一四輯下

巻と五つ外編と既小六編と今第一外編と今第一編と

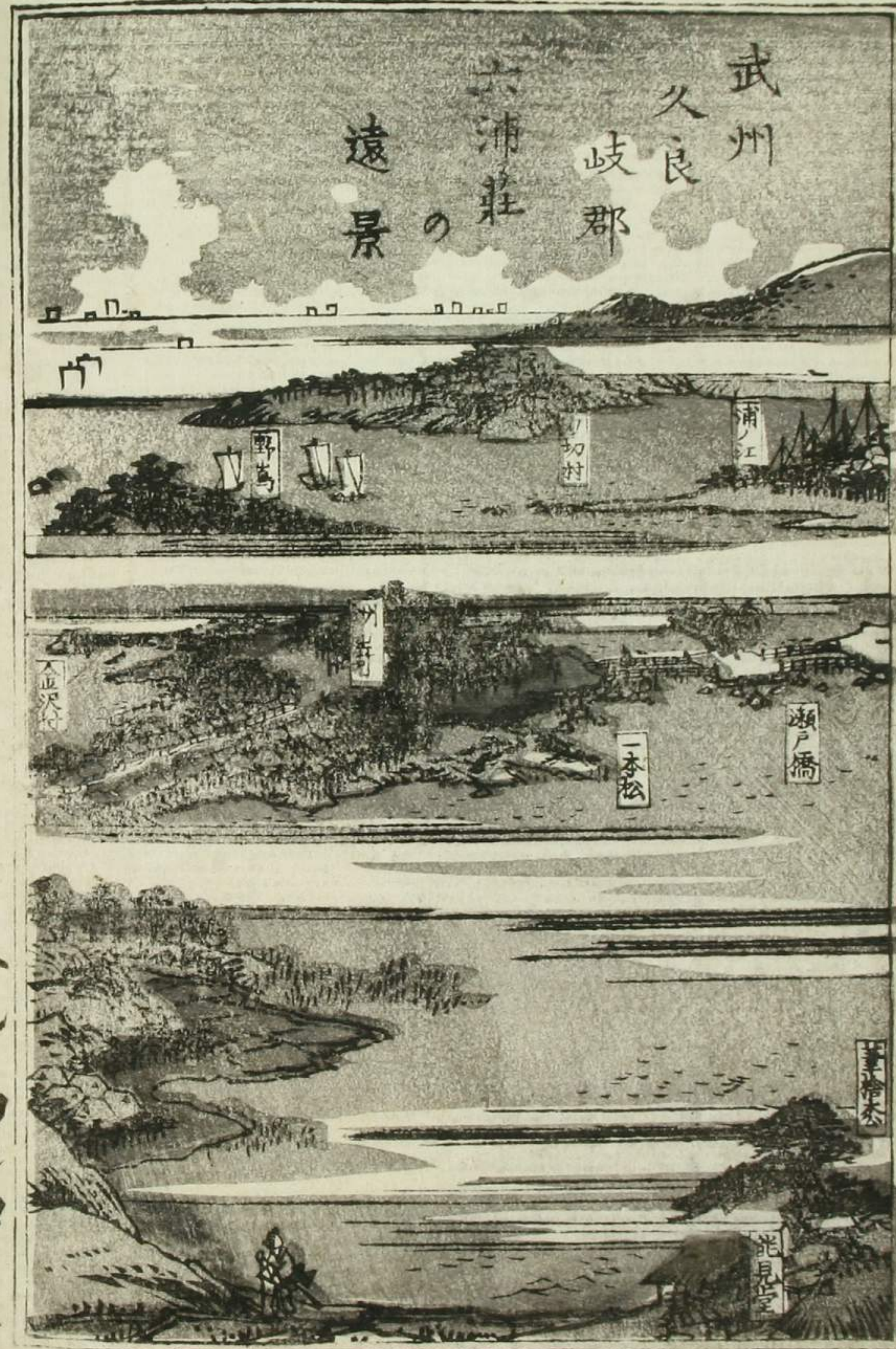
異じ一此此と今第一外編と今第一編と今第一編と

輯の序言と今第一編と今第一編と今第一編と

今第一編と今第一編と今第一編と今第一編と

柳北軒主人再識





貞操婦女八賢誌六編上

東都 爲永春水編次

第卅五回

粒銀を宛て勇婦老僕を厲む
 夜路を侵て少年阿袖を救く

案下阿安ハ量らざるも 鐵八が長譚アム於竹が落令苦
 七が奸悪亦那二りの首級を竊きて遠所を埋りしりませ
 打所毎に胸潰を被りしり又鐵八が赤心を最
 憑もしく思入申す得ざるま何故に我を八代と見遠て
 斯る密るを報知らりけん先其所以を問ひ定めて後

女賢四輯の四

我名を明までも送く人あらずと思ふゆゑ些一小膝を杖
 ませて 儲ハ和主が 尊の 團一 歎八隻でひりしよる 听バ
 听く程痛まじきお竹さんの身のありゆき二徳越一の山病
 氣と和主が 辛苦ハ奈何ありけん心尽し其甲斐なく
 今人生死も判じとら 團一 柗の 漬るもの 和主が心と
 持量まば悲しくもさう口惜うらん然るゆへも 和主が赤心
 お竹さんのうゑのそらさうぞ 這たふ二ツの首級をさへ竊ま 歎
 せー義心忠心世にハ 飾る志操 賞するの尚 ありゆへ
 夫のつけとも不 思えたる 竟ハ 見ましりゆもさき 吾侪を八代と
 映びるゆへハ 奈何ありゆゑぞと 同返せ六 歎八屢々 領きて 其の
 疑念ハ さまさうり 嚮ゆも 既ありし せーぞく 小可ハ 此松
 蔭ハ 昼夜と 判じ 躰を 居て 若和君が この お出りやと 性
 來の人の 氣をつけて 俟がうちゆも 思ふやう 那三個の 懐
 さぬのうち 青柳さぬハ 懐てより 送ひの ありし 中られども
 其餘ハ いまご 面も見 ぬぞ 何を 澄ぬ 各々 合んと 運
 心を 苦しむか 凝てくさく 思按ハ わさる けハ 兒も わさ
 び女と 視バ 其年比と 極子と 此木 蔭より 見定めて
 坐ハ 其名を 傳びて 見んと 思ひ 付ハ 付し されど 倘過ハ

犬走ぞと今日まで駿の乙女等が通りくるせ見かけしと
一度も興び留まりし最茶和君のお出の松子星の光あ
まう見ろふ年比と言ひ恰好といひ威めきども又猛るび
通勇くしき賢女と見しゆ人倘やまうと心内嬉しく猶も
松子を窺ふとも心存知るくても松蔭へ徐くと歩み寄り
遠行こそ首を兼うる跡と思し召する面体めて遠眼の外皆
涙とそそぎ睨張て任せし軀て心を取直し心の内めて併の
血名を二声三声唱入りし立まりのし其松子青柳さぬ其
りらねども八代さぬらお安さぬら二個ふ一個の遠ハとと思ひ

定めて別くくもいふる候八代さぬと斯ハ興ひけりゆせ
たりと所てお安ハ打合候も備も妙なる和主の頓智吾侪が
名ハ八代さぬら實ハ別ち安女さぬらども誠忠義心の針る処
當らばといども遠くを竟め遠流空しくても今宵面を會
甘と透ひのよろこび此うあなと書はまて銀ハうち抜き
たる首を袖のさけて屢々顔の汗を拭ひ備ハ和君ハお安
さぬらで八代さぬらで在るはよる儘にお名をも所定も公
急ぎのせうく候し堅め松子を明せしり返すくも先念
此で今更言ひ解く候もさく身の愚さを悔るのし面

目もろき仕合と賸活とお安ハ所何人ぞ否鹿忽びハ似
たれども吾侪が一言の辞も同を只其旅子を見レのミモ
八代さん吾侪りと視極ハ是和主が智あり悞ちとのミモ
くもどと執成を言活め鉄ハハのよく恥て居らりしが須
斯の以て再び言ふや斯のよきハ何とや身ノ非セ
饒るの似ハミととも八代さんおひらむとて他一人の聞是
くもど和君のお耳へ入らるるの是亦不肖の幸ひなり一升ハ
左ま右もは是何より先ハ聞まわしハお梅さぬハ奈何
る仔細めてお道ハ荷擔ハ為るハ一又和君がこのお身の上

包まらるる報知さむと聞ハ是をお安ハ懸めよりみく
那船樓の支より一七片瀬川ハ流是まららるるて三個
お安ハ代ガ面を會しまより又塚のりりしハ彼野ハもま
變ひりしを箇極くハ計らハ青柳を救ひ出し此金澤ハ
道は来しハ那お道ガ雙言討を義めよハて助太刀をせし
其ゆゑハ如此ハ其ハ其ハ吾侪ハ鈍まらるるも愛嬉ガ
為ハ橋とるり命も既ハ危ふらりしを不因義ハお龜ハ救
らるる亦ハお龜ハ別是ら其崖略を説示し夫より吾侪ハ
虎口と遁是最前這野より程遠くハ瀬戸村まで忍び

来ウたりめて聞一此地の大変生死を俱中と誓言ひしるお梅
さんまお道とやうきん竟み其場で命を歿しその首はま
洲寄る此松蔭へ梟らまと言ふ一ときこの口惜ま今ハ
日数を経一とをゆゑ假令那所み首はかくとも怨を道
せ一其跡を争でり一目視ざるべきと這所まを来々
量らるども和主の遭を松子と听け六速くも首を竊
せ一と世の有がま赤心ぬ競ぶま又恥ろ一此身の
不覺せ今更の悔とも詮ハゆゑぬろ一と言ひら須臾歎
息一首をまてぞ居らうける鉄ハ夫まの長譚りを

打竹て該まも一の果も一の今又お安が公根を桂量るるど
痛ましく慰めうねて居らうしが稍わけて小膝を我れ今
驗ハ星の悪くてる視るふつけ聴ふつけ善りどと稀ハ
あて幸多きうぬも幸なくしてお竹さぬぬお好悪をば
憑とと思ひ一お梅さぬハ仇ハ嵐ハ吹散らま今ハ
此世ハ亡人とあうりまて老の身のま奈何とも
詮術ハ一此人の憑ハ和君左中も右中も思按ま
言ハまお安ハ突頭のも流石伶俐乙女でも敏ハ恋の糸
ま一が斯てハ果とを思ハぬぞ馳て腰纏の財布より粒



銀一匁を取出し銀八の渡しと言ふやう吾濟ととも
今更ぬよき思按もあつねども這所ぬ鼻たる二の首の
面の皮を剥くとのきバ倘質首ぬあつるまぐきりと思ふ疑
念ハ和主もあつるべし夫等の實否と乳まん為吾体ハ須
更此地ぬ止まり竊ぬ動靜をきかちて後青柳八代の二
賢女が在家と索ねて相譚ん和主ハまゐる金を携へ一旦
此地と立去りて過一日恩を受くと言ふ彼客店ぬ尋ね行
客就の不足を償へて餘まる金を盤纏とて武藏相模を
隈なくあつるお竹きまの行旅と索ねぬ世の安否はるるべし

知るるん吾体が思按ハ先是なり和主が公奈何ぞやと言ふ
まて銀八感謝ぬ堪へず斯まをぬ心つけぬひ賜あるれ
辨ひぬよきまを那恩人ぬ報ひぬらん又お竹きまの度ハ一
小可が命ぬ換てくるらむ安危を祈はさん尊慮せ易く思
召せと言ふお安もよろこびて借も送ひの長話ぬ思ふ小
夜と更せぬ圓人ぬことを幸ひぬまを言ぬるも果するぬ
傍まに袂と別しんるらむ吉左右知らせよと言ふまを
卓頭銀八も心と俱ぬ身と起し馳て別きて西東了に
姿も木隠れけり話説分兩頭借もあつる夜圓塚山ぬて

真弓と青柳といふと合ふとまじらざるを打きて谷底へ移り居
たる那お袖は幸ひぬして身を傷らねど須史が程は息絶ぬ
誰かゝるゝ二三声喚びける聲の耳は入り蘇生て能く九
年の頃十七八才ゆへまじらざる縁の前髪艶あつる美少
年の膝のうゑお脛もひびくお抱ききていとあどけなき形容
お袖はたつと打駄き抱ききりもと掉放し逃んとまると那若
流は静くお袖を引とらぬ乙女公よ介は驚くまを吾侪はつとく
悪漢をいひ這所より程も遠くぬ忍ぶが岡の片垣のふいとも
閑ふ世を住る香場有女太郎と喚る者あり今朝も

舞う渚要ありて新発浦まをのりしお昼は暑氣の堪が
けは須史那所お憇ひて夕涼まををせ出しが急ぐぬ路
ぞと徐くと夜風を肌は吹透させ更にお更し短夜の獲
聞けども尚急がむ歩むとく遠所をたまたまの圖視
彼方お介は乙女見捨て行んハ流石めて抱き起して
介抱し蘇生しお前のおまの吾侪がよるを此上
命めても乙女の身で真夜中といひ只一個あつても
素直で此辺りお介を氣絶為さまひし人
跡追ふて又ハ継ぎ母親の姑の難面さま家出して

文賢四輯の四

這所まをりし道はむぞ持病めても起りて息の
絶するう奈何くと問ひけりまお袖へん言活さ
身の恥くしきと悲しきふ口ごりば居たりしが聞けば
其名も有女太郎苗字も香場と名乗る一尚や夫と
疑ひの雲さへ晴ぬ月影ぬ若荒が顔をばくくと視る
容貌ハ艶しけきども吾意人ぬ似も中らむま其
名の似たるゆゑ猶も思ひの強増て泣じまきれどあやめ
落る泪のやせむく伏あぐまらる娘氣を良きと見てや
有女太郎ハ最真實氣ニ慰めり尚も松子を尋ねる

山ぞお袖も今ハ躲ひふよりかくるそのうぬの崖略し
梅太郎の妻お張りとて圓塚山の危難さ告るをうち
所く有女太郎ハ孩き呆れ一面色して楮ハお前ハ多塚
にて名不聞へる神宮屋のお娘子ぬてあうりよぬ痛
まや處女の身で無き人ぬ見素人と思ひ心の一筋ぬ
お張とやふ欺くまかる難きを做らるりよぬあるまき
妻ぬわらぬど憎むまらお張る余きども渠ハ其場を
ささむお前の祝公の身ふらうまお前ハ友竹ては谷へたび
落しふたりまもこが介抱ぬ蘇生し一是も何々の因縁ら

先小就てもか前の身まへの久く候令さしか張ちやうの伎倆ぎりやうもせよ一旦いつたん
神宮屋かみやと家出いせでせし今更阿容いまさらあひらと尋塚あづまへ帰かへる面おもを
所為ところをいんか前まへの心こころ奈何なにかぞやと問とはして袖そではさし
俯向うつむき忘わすれぬてぞ居ゐるけり

第廿六回

艶言えんげん迷易まよひく貞女ていよ名なを汚よごす
陰情いんじやう陽安やうあんく悪少館あくせうかんを追おる

當下あつち香場かうばう有あり女太郎にょたろうハお袖そでが公こうと大おほく又また支しと撞つして獨ひとりり
領うりぎ俯向うつむく顔かほせき一ひと覗のぞきて斯いか言いを何なにと申まをしてて
かういも思おもはまんう嚮むかよりお前まへの松まつ子こせころふ神宮かみやへ歸かへる

まゐりて那あの様さまの跡あとをくみ鎌倉かまくらへゆくかむらん
伴当ばんたうをまゝ連つれせむ處女ぢよのまゝて只ただひより遙はるかけきまを
行ゆん又また悪漢あくかんのてふうを奈いかうするさふらんも
一ひとはひよりさうこのまゝゆせよ鎌倉かまくらへとのま梅うめさ行ゆく
先まさふさでらるるねを尋たづねとて右みぎ辺へ左ひだり辺へと張ひら旅たびに
日ひと送おくらば不思議ふしぎの災わざひもさむざむざいへ此この候まへ尋塚あづまへ
くうていりや梅うめえい會あひのこ胸むね又またき繼つぎ親おや上かみ奇美きみ
らして今の歎なげまふ百倍ひゃくばいも増まして悲かなしきこひん基もとよりか
前まへと私わがと聊いさう縁ゆかりも由ゆかりもあらねど嚮むかふ必かな死しを救すくけり
女に賢たか賢たか四よ輯じの四よ

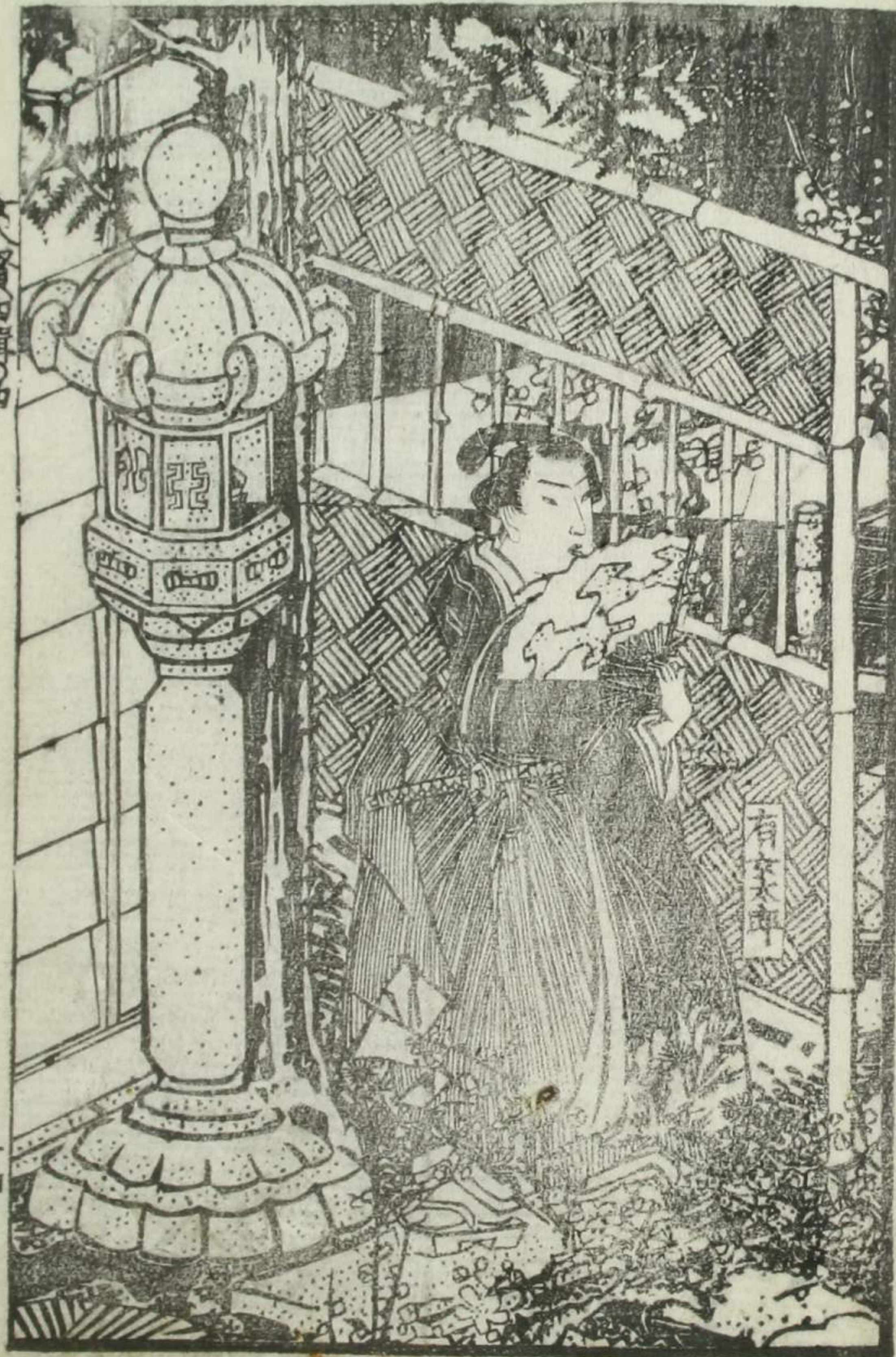
會つたは心も増て悲しくらん最浅間しるるれども依の
此身を妻と笑と松の標を破らざらん不羨の似てさす不羨
くつと心の裡に思接して伴われつ伴俱人月忍ぶの
岡近き那白屋をばはるる色ける什麼此有女太所ハ
者ぞ其すもと尋ゆる基ハ鎌倉の出産ゆて殿き者の子
りく容貌の艶麗きこと女子ふしても見まかすは最
きうき生立ゆは西親とも小峰くよるる比やもらん
女兒ぞと傍くと舞の一曲もあらせむ何と黄金の蔓の奴
世子の蔭に立二個ハ老行先も安らけく左に團扇をまふ

へと思ふが故に稚児まう糸竹の道ハ言ふもさうり舞ひの
旅もあらせつ幾年月を經る程に此有女太郎が十五の稔
親とも世を去て倚辺のまき身とよりける思ひがけもその
膝の秋扇が谷管領家より童扈從の抱へらるるその容
貌の艶きのま最怜利氣の生立ゆは定正ぬの心み
香場と言ふ苗字さく乞つが俣の賜りて寵愛日夜の
増みぞ是より心驕慢生ト基より嗚呼の癖者も六同ト
奥の勤め居る女子どもを哄誘術の名さく立のく
有女太郎ハ尚飽るで現存在主君の側妾も那鳥羽玉の

女賢四輯の四

心せ寄せが流石の憚りの関もあまは打付申も言ひ寄り
うつく折もなると思ふうち頃も春の中旬とて人の心も
自ら浮立空の奈風のそよと吹り梅が香の時知り顔の
咲乱は十日をりの甲夜月之隈を照き庭もせの巻糸
巻てや鳥羽玉ハ椽先近く端居し物淋し氣のよ見ゆ
あぞ折をとりと有女太郎ハ膽太くも忍び寄り月比
寄へ花の聲言て心の丈せうき口説は基鳥羽玉ハ其母ある
色嬉が氣を承継けん性とし七色を好み最淫ハ一息
女子多ふ今有女太郎が言話と言ひ其容貌の艶きを

贈うとどや思ひけり赤らむ顔ともうもふ
うち騒ぎ奈のめやせんと憐憫折しも恋地入の色影と
此小室へ来る者あり是則定正ぬらり思ひがけり
るまは二個ハちと打駄きし流石ハ白徒色ハも出さざ
其場ハよまふ言ひきと何支もなく濟しうと
色氣色よろしうだ幾程も有女太郎ハ身的眼せ
賜りら鳥羽玉ハ其俵の館の内へハ置きしと寵をハとド
ゆめ似ぞ最疎くく程ハ此より速くも内君多る花の
方ハ听へし基より妬しと思しき鳥羽玉ハ六編ハ



扇が谷の
奥の
梅よ

有女
誘ふ

うを玉

よりい尚渠をま追ひ出さんと西側が悪りを種くと
ひらひらい言ひとく人にも言ひを自らも悪きぬ
換せしく定正ひく御氣色ひく今うとそ追ひも出
さまざんぬ依て那艶嬉ハ味く心を痛りく儲へお安を
荷擔ひしより開ハ此次の年より却てまこ有女太郎ハ其
身の仕出せし言と六言へど昨日までも今日までも寵を他ハ
茲ひるけは争う鳥羽玉を我はみ入は扇谷家の權臣
も成りせんと思ひし其言はるるのそりて館の裡
又追拂は今西觀もひらぬ身ハ鎌倉も橋がく世の

知己をい當ハ武藏の荏土へ尋ね来り忍ぶが岡の片辺を
日暮の里ハ空房ありしを僅の金にて購求らるる家
業も知らぬ身ハ肩ハ柄も乗せがく或ハ里の種兒ハ筆
様道とありへもし又ハ城下の乙女も糸竹の業舞ハ
ひらぞ覺へしまふ教へなどし細き煙りを立るゆも元來
浮世の白者ハ人を欺く癖ハ止ませしうらぬうハさも
又うらしを命程ハ那ハ袖ハひらるるも有女太郎ハ艶さ
エバ言活の憑しさま渠ガ橋家へ伴ハ人目たうりを渾家と
喚は候ハ良夫とうづきつ今日と暮を翌日と明せば四隣の

ひも訪来る客もよき一對の雛より世の浦山一き女夫とと
るま口惜くて一日も速く吾夫の在家を知らば索遣兩個同
居の暮し久假令貧しき得世でも熟ぬる技の栲舎水をも
汲まぬ變もせぬ昔話の似し色とも妻ハ小川の衣洗ぎ野夫の
山で木柴苅る鎌倉のまきと鄙めまれ渾家よ良夫と喚び
喚びと暮さる奈何の嬉しうんを他一男の他一名を喚ぶる
難面さ口惜しき今とそ外に寄辺る身は今更の甚麼せん
思ひ返しの憂色を顔ゆも出さる暮をぬぞ俟の便りか
あそ俟ぬ月日の立安く七月も他は暮行の朔月も末のる

俣の野山の色も移りゆき此身をうりの秋もねと物思ふ
身ハのど尚乾ぬ袖の露しと泣音せ余所ハ洩さる
忍ぶ心を慰むる世で俱音の持の写虫の声術の梅も色
替て憑もしげらまき旋紅葉我のそ立る標夫ハ一言
報知とやと思へばゆと懐くく那処の空と三芳野の田の
面の雁の便りまきまきつらむと心のそ急るくま折る
有女太郎の尋ねても細小鎌倉へまきける飛脚の疾り来ぬ
中ハ奈何とも詮術な一思ふは斯まき啼りのまきハ今行
傍のちまきるらん然と三月の四月のやどはハ尋ねるまきハ

ひるまど在家の和室一其うらんで友白髪まを添ひとびて二
世も三世も其先まも末いと長き縁一うらを假令會日の
遅くとも余のそむ急れそと慰ららるるも慰まぬ心を自ら
取直し候小甲斐も秋も過ぎ冬と替り其給も憂うとて
暮行て明は文明六年の春も弥生とるるまも鎌倉よりの
音信なくお袖ひいと候侘しく中をさすま悲しき小獨熟
思ひや此家の主人ハ誠心いげさるま言活ぬわごして
後初まら九月候甲斐今も吹く風の便りも聞ぬハ
猶も此身の凶事おめでりむと大星のそらでゆるる七月の

廿七日圓塚山ゆて不思議にもとて逢ふと祝さんの今ハ
何所小居ゆとも知らず月日と古郷の養親のりまも思ひ
出さるる懐ろ一さ小塚へ行く人あると只有文太郎
おとさきと一七竊くふ動靜を聞せし此程神言香の大妻
り情由ハゆとも知はねども郡知縣の大六が親の人数を
引連て候小夜中の押掛来り夫婦ハさうり家内のもの
ども倉残りなく斬尽し家財も落多く召揚られし此
夏速くも鎌倉へ聞へ大六が旧悪ゆらまを既小命も老ふ
うらを奈何し七道とけん積貯へる金子を携へ竊小被

地を速電して今行来も如きほどと世の種々なる物なりと余
野更らしく譚をとお袖の所より悲しきの又ひとら増を古郷の
凶信假令親公の心ざぬハ好も何と返も何と返は幼少と云う養
ハ是る恩恵を幸で忘るべき余も此身やど世の薄命者ハ
かゝ実の親も養親も非令の此世を去ゆひとて歌へ知は
うらも討更難き女子の甲斐なき夫の就ても我良夫の亦
姫さん小面會ハ愁をを報を術はんと思ふの懐くく
左やせん右やと胸にの痛めても又詮術なく果の涙の異
竹の世ハ春をうら春をうらぬ心の憂さごとやせり有石一編

由數経て誕生も下旬ありし頃疾黄昏の門口の枝折
外より押明て内へ入り来り一個の男脚半甲掛りし女
提する笠を表面の裏の腹せりし有女太郎さぬハお宿
ある小可へ去給の秋鎌倉へ登りしは飛脚の者でござりし
と听てよりのお袖と俱に有女太郎も走り出開の俵兼
此方へと言ひて一室へはひけり必竟飛脚を喚ひ入るを俵
什麼なる譚のりる開の次の回を見て知らん

貞操婦女八賢誌六編上
女八賢四輯の四

